

## キリスト教教育と私 (4)

塩 野 和 夫

### 4

#### (1)

1968(昭和43)年4月、同志社香里高等学校に進学した。正式には入学であろうが、無試験で自動的に持ちあがったあの時の気持ちには進学という言葉が似つかわしい。そもそも学校の場所は同じなのだから、通学など日常的な生活スタイルに何の変化もない。先生方も大きく変わるわけではなく、チャペルと授業を重んじる同志社の人格教育も一貫していたわけだから、教育内容も基本的に変わらない。それに160名ほどいた香里中学校の同級生は全員進学したので、学校の雰囲気も変わるはずがない。柔道部では中学校を卒業した後の春休みには、入学式当日を含めて当たり前のように練習への参加を求められた。要するに同志社香里中学・高校は実質的な中高一貫教育であった。

それでも違いがなかったわけではない。香里高校から入学してくる新入生は200名ほどいた。彼らと香里中学校からの持ちあがり組みを合わせると、新1年生は350名程であり7クラスになった。クラスの名称も中学の1・2・3という数字読みから、A・B・C・D・E・F・Gとアルファベット読みが変わった。ショックだったのは、2年生に進めなかった生徒が二人クラスにいた事実である。「高校は義務教育ではないので、成績が悪いと進級できない」現実を、彼らの存在を通してピンピンと感じさせられた。新しく同志社香里高校に入学してきた200名も刺激になった。彼らにとってチャペル・授業・部活など香里高校のプログラムは新鮮だったらしく、何事に対しても意欲的だった。その一人で後にサッカー部のゴールキーパーを担当していた柳田は海の星幼稚園の出身で、驚いたことに片岡美代子先生のクラスだった。柳田とは幼稚園でもクラスメイトだった。

何より新鮮だったのは新しく校長に就任された生島吉造<sup>1)</sup>先生の弾けるようなやる気である。1906（明治39）年生まれの先生はすでに60代であられたが、若々しく精悍であった。上賀茂の自宅から誰よりも早く学校に来られた生島校長は、毎朝良心の碑が立っている庭の端に立たれた。道の向こうは駐車場で、登校する生徒は皆校長の前を通った。生徒はたいいてい5人、10人と集団になってゆるやかな坂を登って来る。すると、先生は「お早う！」「お早う！」と声をかけられた。見開かれた眼には一人の生徒でも見逃さずにおかない迫力がある。かなりの生徒は少し手前で生島校長を認めると、だらしなく外していた制服の胸元あたりのボタンを急いではめ、先生の前で頭を下げるのであった。

生島校長がチャペルで最初にされた講話だったと思うが、それは「授業料の値上げ」についてだった。「これまでは毎年少しずつ上げて来たが、今年は9000円代に引き上げた。皆さんのご両親には負担をかけて申し訳ないが、これで安定した経営ができる。また、今後3年間は値上げをしないので、諸君も今回の値上げについて理解していただきたい」と話された。授業料の値上げなどチャペルでは聞いたことのない話だった。もちろん、いろいろな場で保護者には語って来られたのであろうが、校長は生徒にも了解を求められた。「この先生は生徒に対して他の先生とは何か違った見方をしておられる」と私は強く感じた。このようにして高校生活が始まった。

\*

生島吉造校長が就任早々に始められた取り組みの一つに、「無人牛乳販売」がある。食堂地階にあった購買部の片隅にガラス張りの冷蔵ケースが置かれ、中にはぎっしりと瓶牛乳が入っていた。ケースを開ける取手は、生徒側に向けられている。それで、生徒は自由にケースを開けて牛乳を取り出し、飲むことができた。冷蔵ケースの横には料金箱があり、1本20円だった。販売を始めると生島校長は、「無人牛乳販売は生徒諸君が自分の責任で牛乳を購入することにより、諸君の責任感と自立性を養う」と何度もチャペルで説明された。ケース設置後は毎月、「今月の料金の回収率は」と公表された。回収率はいつも90パーセントを越えていたが、100パーセントの月はなかった。1学期も終わろうとしていた7月頃に、偶然体育館前で生島先生とすれ違った。挨拶をすると、先生から私の方に近寄って来られ「塩野君！」と名前を呼ばれたので、びっくりした。「塩野君！僕は停学中の生徒を自宅に招くことにしたよ。彼ら



校長室の生島吉造先生

の多くは学校教育では評価されないのだが、人間には成績では測れない大切なものが一杯ある。だから、彼らはきっと社会に出てから大きく伸びてくれる。塩野君には、学校教育で測れない人間の可能性を大切にしてほしい。それから、2学期になったら校長室に話をしに来てくれたまえ。京都の自宅にも出かけてくれたまえ！」名前を知っておられた事実にも驚いたが、話の内容にも啞然とした。成績で測れない人間の大切なものについては、それから何度も生島校長から伺った。その姿勢は人間を育てようとする教育者生島先生の根本的な立場から出て来たものである。

高校1年生のクラス担任は数学の秋山先生である。黒板一杯に丁寧に板書されてから、ボソボソと話される先生だった。しかし、一人ひとりの生徒に対しては鋭く観察しておられた。柔道で手に擦り傷をしていた時、「傷は大丈夫か。あまり無理をしないように！」と教室で声をかけて下さった。中学3年生の時の担任浜里先生とは全くタイプが違ったが、校内では2人の先生が一緒におられるのをよく見かけた。とても親しくしておられるようだった。1992（平成4）年秋、同志社大学神学部で博士論文の仕上げに掛っていた時に、同志社香里高校のロングチャペル講師として招いていた。その時の校長が秋山先生である。チャペルの壇上に立つと、20年あまり前に

高校生として参加していた時のチャペルの様子がまざまざと思い出された。「何も変わっていない、あの頃と同じだ」と思いながら、講話した。チャペルを終えて校長室に戻り秋山先生の前に座ると、高校生に戻っていた。「博士論文を書かれたら、その後はどうされるのですか?」と尋ねられる先生に対して、少々自信なく「来年4月から、どうなるのか分かりません」と正直に答えた。「なに、何も心配することはないでしょう。必ず就職先は決まりますよ。今はしっかり博士論文を仕上げてください」と励まして下さった先生も、まさに高校1年生担任の秋山先生だった。

高校生になって授業に取り組む態度が一変する。中学2年生の夏以来、死と人生に対する問題意識から生じていた動揺は、中学校で授業に対する勉強意欲を著しく低下させていた。あの動揺が、香里教会への出席によってとりあえず落ち着いていた。それに同志社香里中学校卒業式の日に情熱をこめて説いて下さった「勉強はするものだ!」という浜里先生の言葉が、高校生活の指針となっていた。授業に対する真面目さが回復すると、先生方の講義は実に面白いものである。ほそほそと話される秋山先生の数学は、口調とは対照的に明快な論理が貫かれていて、問題を解き明かしていく過程が興味深かった。世界地理の中村先生は、大阪弁丸出しの語り口調で手振り身振りを加えた上に目を大きく見開いて、「君たちなあ!」と話しかけて来られた。生徒はすっかり中村先生の世界に引き込まれ、授業は先生の独壇場だった。体育館の1階には講義用の部屋が1室あった。あれは性教育の一環だったのだろう。野原先生が男性器を拡大した図を黒板に張り付けて、「こんなに大きな図は見たことがないだろう」と話し出し、説明して下さい。ところで、高校1年生の春に取り組んだのは学校の勉強だけではなかった。中沢のお兄ちゃんから、「受験のため、高校生になったら通信講座を受ける様に」と勧められていた。それで学校から帰ると、通信講座の問題と向き合った。高校の勉強よりずっと難しかった。2時間も3時間もかけて問題を解くといつも真夜中になる。けれども、受験生は「4当5落」と言われ、睡眠時間を削るのは当然だった。ようやく仕上げた解答を送ると、2週間ほどして真っ赤に添削された用紙が返送されてきた。

柔道部の部員は、高校1年生の春には以前とかなり変わっていた。高校3年生には、江崎先輩・川床先輩・高井先輩・安形先輩・田中先輩・八木先輩・岸田先輩・高砂先輩がおられた。高校2年生には、東先輩・青山先輩・高尾先輩・久保先輩・西村先輩・吉崎先輩・本橋先輩・矢野先輩・出口先輩がおられた。同級生には、高鍋・加

藤・松宮・山下・小杉・有本がいた。中学3年生で結核になった藤倉は退院すると柔道場に姿を見せていた。中学3年生には、西山・林・宗重・今元・平井・中井がいた。中学2年生には久保・山北・川辺・真鍋たちが、中学1年生には木下・上原・今井たちがいた。同志社大学で柔道部に入部されたのが、正木先輩と松浦先輩である。柴崎先輩と植岡先輩は、アメリカンフットボール部に入部された。アメリカンフットボール部の合宿所は同志社香里のキャンパスに近接していたので、柴崎先輩と植岡先輩は時折柔道場を覗いて下さった。河津先輩は家業を継がれたと聞いていたが、練習だけでなく合宿にも参加して下さいました。松浦先輩が大学入学後初めて指導に来て下さったのは、5月である。力が体にみなぎり一段と技に磨きをかけられた松浦先輩は、練習後私に声をかけて下さった。そして、「塩野！練習が終わってから一日500本打ち込みをすると、投げ技は型が決まるぞ！」と言われた。それは「一日500本打ち込みをせよ！」という命令口調ではなかった。しかし、数日後から松浦先輩のアドバイスに従い自宅の庭にあった鉄棒にチューブを付け、家庭教師に行く日を除いて毎晩500本の打ち込みを始めた。夜に暗がりの中で行う打ち込みには、2時間ほどかかった。夏の合宿は岡山市で行われた。岡山市駅からすぐ近くに総合運動公園がある。その一角に洋風で屋根のそそり立った見栄えのする大きな建物があり、そこが合宿所となった。1階に2段ベットが並んだ部屋があって、寝室兼休憩所となった。私の居所は2段ベットの上段だったが、合宿も半ばを過ぎるとベットの階段を上るのがしんどくなった。食事は運動公園のすぐ前にあって喫茶店の様にも見えるレストランの2階で、三食いただいた。和風だった金沢と違い洋風で、食事には時にナイフとフォークを使った。ローストした鳥のもも肉を食べたのはこの時が初めてである。午前中の練習は関西高校に出かけた。毎回の練習に関西高校柔道部の部員が付き合ってくれたので、彼らとは親しくなった。練習を終えるとシャワーで汗を流し、しばしば同級生と水着を付けずにプールに飛び込んだ。午後は近隣の高校を回り練習試合をした。試合は高校2年生と3年生の先輩がされたので、1年生は見るだけだった。試合後には合同練習をした。高校生最後の試合は8月に行われた国体予選の大阪府大会である。ところが、大阪市立中央体育館で行われた試合が始まり先輩は試合に備えているのに、野原先生が来られない。ついに部長先生がおられないので、3年生の先輩は最後の試合に出られなくなってしまった。それから数時間後、風邪で顔を赤くされた野原先生が来られた。先生は柔道部員全員を集められて、皆の前で「申し訳ない！」と深々と

頭を下げられた。先生はひどい風邪声だった。風邪をひき、どうしても朝出かけられなかったという説明だった。

香里教会出席は高校生活で欠かすことのできない要素となっている。日曜日には朝9時に始まる教会学校の礼拝から参加し、昼まで教会にいた。昼を過ぎてても家に帰らない日もあった。試験中も教会を休むことはなかった。教会学校の礼拝は小学生が礼拝堂で行い、中高生は玄関と礼拝堂の間にある集会議場で礼拝をした。その頃は、日本キリスト教団出版局が発行する『教師の友』に毎回の説教例が載っていた。校長の中西典彦<sup>2)</sup>先生は左手に『教師の友』を持ち、熱心に説教された。大原先生・粟飯原先生も説教された。礼拝には中高生が10名ほど参加していた。その中に同級生の千田や中岡もいた。礼拝が終わると、牧師館の2階にある部屋で高校生会である。牧師館2階には2部屋あり、階段を登って右手が高校生会をした和室である。左手にもう一部屋あって、そこは大里牧師の書斎であり、中を見たことはなかった。高校1年生の時の高校生会の担当は、大原健一先生と松本陽子先生だった。当時大原先生は新婚間もなく、新居のアパートは香里教会から香里園駅とは反対の方向に歩き、かなり急な坂を登りきった丘の上にあった。高校生の数々が昼を過ぎてても自宅に帰らなかったのは、大原先生のお宅にお邪魔したからである。遠慮を知らない高校生数々が突然お邪魔しても、大原先生はいやな顔一つされなかった。それどころか、私たちを歓迎して昼食を振舞って下さった。昼食はいつものようにサンドイッチである。皆でパンの間に挟む具を用意する。その間に奥様が食パンを買いに行って下さったのだと思う。食べ盛りで遠慮のない高校生5、6名のため、どれだけの食パンを用意して下さったのだろうか。昼過ぎにはテーブルの上に、食パンと皆で用意したおかずが乗っている。感謝して、それぞれに好みの具をパンに挟み、いただいた。とてもおいしい昼食だった。高校1年生の夏には一泊二日で和歌山県南部町にある南部教会へキャンプに出かけた。宿舎は教会付属の幼稚園園舎である。南部には労務園というキリスト教の施設があると聞いたが、どこにあるのか分からなかった。南部のすぐ沖に無人島があって、午後はその島に舟で出かけて泳いだりスイカ割りをして楽しんだ。遊ぶ時に大里牧師はまるで子供のようにはしゃいでおられた。沖繩育ちの先生は海がとてもお好きなようだった。宿舎に帰り夕食を終えた後に、升崎外彦<sup>3)</sup>牧師の話聞いた。このキャンプには竹内勤・寛兄弟が参加していた。2人は家庭教師をしていた私の教え子である。徳育の一貫として教会学校のキャンプ参加を勧めた。それに御両親が応えて下さって、

2人は参加したのである。

中学3年生の4月、小学6年生になったばかりの竹内勤君の家庭教師を始めていた。竹内君は翌年3月に、見事同志社香里中学校の入学試験に合格する。彼には1歳下の弟、寛君がいた。そこで、お母さんから「4月からは寛の受験勉強と勤の勉強を見てほしい」と頼まれた。アルバイト料は3,000円から5,000円にあげられた。竹内家に行くのはやはり週2日で、勉強時間も予定では同じ2時間だった。しかし、実際には2時間半くらいかかった。2階の勉強部屋に上がると、同じ部屋にある別々の机の前に2人が腰かけている。まず、寛君にドリルの課題を与えて勉強させ、その間に勤君とは国語・数学・英語の復習をした。勉強する間、2人は真面目に机に向かっていて、ところが、勉強の合間にはたちまち賑やかになる。1人だった時にはおとなしかった勤君が、弟と一緒にだとおどけて見せた。寛君も兄に負けず、私の関心を引こうとして、おどけるのだった。

6月に入り、梅雨の晴れ間の日曜日だった。少し前から、竹内勤君から「この頃、よく釣れている川がある。見に行かへんか!？」と誘われていた。それで、教会から帰ると待ち合わせて、2人で自転車に乗って釣りの様子を見に行った。意外と小さな川だったが、10名ほどの子供が橋の周辺に群がって釣りに興じている。フナやもろこが釣れていた。少し下流には新興住宅地が広がっていて、都丘町とは別世界のように思えた。釣りにも少し飽きて来た時、竹内君が新興住宅地を指して、「あっちの方に自転車で行って見ないか？」と声をかけてきた。どんな家が並んでいるのか興味を感じたので、彼の誘いに「ちょっと行ってみるか」と応え、2人でゆっくりとペダルをこぎ始めた。一戸建ちの家にはそれぞれに門と垣根があり、庭には芝生を植えている。庭の奥に家が立っていた。大体同じような作りだったが、家の建て方も庭の様子もそれぞれに違って面白かった。ゆっくりと自転車をこぎ続け、住宅地の真ん中あたりに差し掛かった時だった。「まあ、エッチ！」という声突然響いて来た。何のことか分からなかったが、思わず声の方に目をやる。すると、水着姿の女の子が立ちあがり、私たちの方を見ていた。思わず目をそむけ、2人は急いでその場を立ち去った。それから1週間、お詫びも言わないで立ち去ったことについて、一人で自問自答し続けた。いろいろと考え思い悩んだ末に、やはりお詫びはすべきだという結論に達した。それで、次の日曜日に教会から帰ると、自転車でまっすぐに女の子の家に向かった。お宅はすぐに分かった。手には1年間にわたって貯めていた教会学校のカードを貼った

カード帖があった。門のベルを押すと、女の子が出て来た。私は1週間前のお詫びを言い、お詫びのしるしに1年間かけて貯めたカード帖を差し出した。受け取ったのは、日に焼けた顔に眼だけがくりくりとした女の子だった。カード帖を渡すと、それ以上言葉を交わすこともできず、すぐに自転車に乗り一目散に自宅まで走った。

1学期の最大の問題は、中沢のお兄ちゃんから指示された通信講座だった。問題用紙が送られてくると、2週間ほどの期限までに解答用紙を返送しなければならない。睡眠時間を削って取り組み、郵送した。するとしばらくして、真っ赤に添削された解答用紙と新しい問題用紙が送られてくる。1学期の間はそれを繰り返し、疲れ切った。学校生活を中心に一方にクラブ活動・教会活動・家庭教師があり、他方には通信講座があった。1学期を終え考えてみて、両立はとても無理だと思った。それで夏休みに入ったことでもあり、「どうすべきなのか。自分はどうしたいのか」をゆっくり考えてみた。もし受験するのであれば当面は通信講座を続け、やがて本格的な勉強を始める必要があるだろう。他方、クラブ活動・教会活動・家庭教師は、大学推薦制度という恵まれた環境の下でこそ可能な豊かな高校生活である。「成るべき者になる！」ために受験勉強への道を選ぶのか、同志社香里高校という恵まれた環境の下で許されている豊かな高校生活を選ぶのか。10日間程悩みに悩み考えに考えて、一つの結論に達した。大学推薦制度のもと、自由に自発的に考え求め行動できる豊かな高校生活は誰にでも与えられているものではない。そうだとしたら、今与えられている環境の下で豊かな高校生活を送ることこそふさわしいだろう。せっかく与えられた環境を生かすことなく、今求めている「生死に関する」問いを徹底的に考え抜かないとしたら、きっと高校生活に悔いが残る。だから、与えられた環境を生かして、自由で内容のある豊かな高校生活を送ることにしよう。このような結論に至った一番の理由は教会活動に向かった問いであった。そこで、柔道部の合宿と教会学校のキャンプを終えてホッと一息ついた時に、中沢のお兄ちゃんに手紙を書いた。手紙には1学期の経過を報告したうえで、これからの高校生活について考えたことを正直に書いた。夏休みが終わる頃、実家に帰省した際に自宅を訪ねて下さったお兄ちゃんは、「手紙の内容は分かった。柔道がんばるように！」と励まして下さった。自発的で豊かな高校生活をクラブ活動と理解されたようだった。



「校長室に来てくれたまえ！」と言われていたので、2学期に入るとすぐに生島校長を本館の校長室を訪ねた。ドアをノックすると、生島先生は仕事を中断してにこやかに戸を開けて迎えて下さった。この時伺ったのは吉田松陰<sup>4)</sup>に関する話である。先生は「人間には生きていても、死んでいるような者がいる。しかし、死んでしまっても生きている人間がいる！」と話し出された。それから、しばらく吉田松陰について話された。「吉田松陰の生涯は短かったが、それは彼にとって問題ではない。松陰は幕末という時代を切り開くために精一杯に生き、多くの人に影響を与えた。それだけではない。彼の精神性は現在でも人々の心に訴えかけている。こういう人間が死んでも生きてるんだ。」このように話して、書棚から松陰に関する1冊の本を取り出し貸して下さった。本を借りるとすぐに校長室を失礼した。その間、10分程である。松陰を読み終えたので、2週間くらい後にまた校長室を訪ねた。学内でお会いすると、必ず生島先生の方から「校長室に来てくれ給え！」と声をかけて下さった。それで1年生の2学期以降は1か月に1度か2度は校長室に生島先生を訪ね、いつも5分か、10分ほどで失礼した。だから、毎回決まって話題は一つに限られていた。その頃、伺った印象深いものに「大切なことは」と切り出された話がある。「塩野君！大切なことは問題がないことではないんだ。問題を解決する力があるかどうか、これが大切なんだ。いいかい、真剣に生きてると必ず問題は起こる。学校でも前向きに運営しようとする、必ず問題は起こる。だから、問題に直面していること自体は当たり前だし、むしろ真剣に取り組んでいる証拠なので、困ったことでもなんでもない。大切なことは問題が起こった時に、それに取り組み、解決し、乗り越えていく力があるかどうかなんだ。問題を解決する力、こういう力を塩野君にはつけてほしい！」11月に入った頃、生島先生から「11月29日の創立記念日には、朝8時から若王寺山の新島先生の墓前で記念祈祷会がある。少し遠いが、ぜひ参加してくれたまえ！」とお誘いがあった。

高校1年生の聖書科は前校長 大橋寛政<sup>5)</sup>先生が担当された。大橋先生は毎回のよう小型のテープレコーダーを持って来られ、授業の初めに再生して聞かせて下さった。録音されていたのは、ラジオで放送されたキリスト教関係者の体験談である。いろいろな分野で生活しているキリスト教徒の生きた声によって、現実のキリスト教を知らせようとされたのであろう。テープが10分くらいで終わると、講義に入った。先生は淡々と話されたので、生徒には単調で退屈な講義になった。それでもよそ見をし

たり、居眠りする生徒はいなかった。先生が真剣に講義に取り組んでおられる様子が分かったからである。静かに進んだ授業で大橋先生が感情をあらわにされた場面が3度あった。初めは1年ほど前に夏目漱石の「則天去私」を誤解して自殺した生徒について語られた時である。その責任を取り校長職を辞された先生は、「皆さんは自殺してはいけません！」と語気を強めて語りかけられた。次に授業の内容をそれで戦争体験を話された時のことである。先生は南方で捕えられ捕虜収容所に入れられていた。その時、たまたま先生がキリスト教徒であることがアメリカ軍兵士に分かった。すると、収容所を管理していたアメリカ軍兵士の先生を見る目が代わり、彼らの間に信頼関係が生まれる。それから両者の信頼関係は収容所の運営にさまざまな場面で生かされることになった。大橋先生はその経験を思い出すと、本当に嬉しそうに「キリスト教は敵味方を超えて、信頼しあえる友情を育てる」と話された。第3に先生が強い思いを込めて語られたのが、「罪の固有的実在性！」についてである。ローマの信徒への手紙7章7～25節を読んで、「罪の固有的実在性」について教えられた。先生によると「罪には実在性」があって、それは「私たちの心」に働きかける。誰でも悪いことなどしたくないのだけれども、「罪」は「私たちの心の中に働きかけて悪しき思いを起こさせる。」だから、「罪には固有の実在性」がある。私たちはみんなと仲良く過ごしたいと願っている。しかしそんな思いとは関係なく、「固有の実在性をもつ罪」は私たちの心に働きかけて、友人に対する悪しき思いを浮かばせ私たちを動かして良い関係を壊す。人間関係は罪の働きかけによって、悪循環を繰り返す。パウロはまさにこの「罪の現実」をローマの信徒への手紙第7章後半で語っている。このように話された大橋先生の言葉はいつもの冷静な語り口とは違い、心に強く訴えかける響きがあった。2学期末の試験も、ただ一問「罪の固有的実在性について書きなさい」だった。私にとって罪の力は、中学2年生以来根本的な課題になっていた死の力とどこか似ているように思えた。それでたちまちに大きな問題となる。教会学校に行くたびに、まずこの1週間に罪の働きかけがなかったかどうかを振り返った。もしやましい思いの心に浮かんだことがあれば、礼拝堂で一番後ろの長椅子に座ることにした。思い当たることがなければ一列だけ前の椅子に進んだ。こうして、教会学校での礼拝の席は毎週入れ替わった。

柔道部では高校3年生は夏休みの終わりに引退した。それで、9月になると2年生の東先輩が主将となり、高校1年生も柔道部の中核を担うようになった。1年生が部

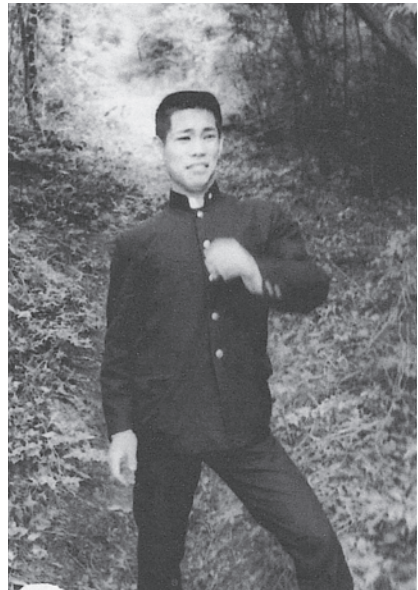


聖書科の大橋寛政先生

活動での役割をしっかりと果たしたのは11月の文化祭においてである。当時、柔道部はぜんざい、剣道部は巻き寿司を売っていた。高校生の校舎であった尚志館1階の1教室が柔道部にあてがわれた。文化祭当日、教室はたちまちぜんざい屋に変身した。机6つ位を併せたテーブルをいくつかセットし、テーブルクロスを掛ける。その周りに椅子を並べると、客席である。30名ほどの柔道部員は3グループに分かれた。まずぜんざいの宣伝隊で、彼らはたちまち学内に散らばっていった。次に接待役（ウエイター）で、彼らは客を呼び込み接待した。最後が炊事担当である。炊事場は教室の窓のすぐ外に設定された。香里園駅から香里園町の方に道を登ったすぐ南側に一力（いちりき）という老舗の饅頭屋があった。炊事場には会計担当の西村先輩が一力に注文された一斗缶の餡子2缶と、縦3センチ・横5センチ・厚さ数ミリ位の餅多数、それとコンロを置いていた。コンロはお湯を沸かすもの、餡子を溶くための鍋を置くもの、餅を焼くものの3個である。1年生の時、炊事場を担当した私は実質的な炊事場の責任者であった。注文が入ると、その数だけのお椀にまず餡子をしっかりと入れた汁粉を注ぎ、その上に餅2個を並べる。さらに餡子が入っていない汁粉を注ぐとぜん

ざいの出来上がりである。模擬店が始まると、前もって食券を買っていた同志社香里の先生や生徒が次々と来てくれた。そのうちに他の学校から文化祭に来ていた中高生、その多くは女子も食券を買ってくれて客席を賑わせてくれた。その中に2人3人と連れ立って来る香里教会の教会学校生徒もいて、私を見つけると「塩野君!」「塩野君!」とはしゃいでいた。30名の部員が一日力を併せて、1万5千円くらいの収益があった。それで文化祭が終わると、打ち上げとして美井元町にあった味一（あじいち）というお好み焼屋に出かけた。部員みんなが一枚120円のお好み焼きを食べ、残金は柔道部会計に入れた。

生島吉造校長から招きを受けていたので、11月29日に開かれる同志社の創立記念祈祷会への参加を考え、時間的見当をつけた上で同級生2人を誘った。あの日、6時過ぎに自宅を出た時に外は真っ暗だった。人影もまばらな枚方市駅で、6時半頃に京阪電車前方の車両に乗った。約束していた千田と中岡も同じ車両に乗車していた。3人で若王寺山への行き方等について話していると、7時過ぎに京阪三条駅に到着した。駅を出ると、町は静まり返っているが、早朝の明るさはあった。3人はまず三条通りを真直ぐ東の方向に歩き、神宮道で北に向かった。京都市美術館に突きあたると、そこで、東に方向を変えて南禅寺に出た。ここまでは予定していたが、その先がよく分からない。見渡しても道を尋ねることができそうな人や祈祷会に向かっている人は見当たらない。それで、南禅寺前からさらに細い道を真直ぐに東へ行くと、幸運にも若王寺山への登山口に至った。3人はほっとする間もなく、直ちに緩やかな傾斜の山道を登り始めた。それから10分余り歩き、もう少して新島先生の墓前に着こうという時に、思いもかけない出来事が起こった。少し広くなった道の端で、生島先生が住谷悦治<sup>6)</sup>



おどけて若王寺山を下る私  
同志社創立記念日 1968年11月29日

総長と休んでおられたのである。後に聞いた話だが、あの日生島先生は住谷先生を案内して創立記念祈祷会に向かわれた。しかし、住谷先生に疲れが見えたので無理をせず少し手前で休んでおられたのである。すぐ前を通りかかった私たち3人を見ると、「おおっ！」と小さく声を出された生島先生の顔はたちまち喜びでほころんだ。先生は誇らしげに3人を一人ずつ紹介下さり、私たちは住谷総長と握手した。間近に見た総長からは、引き締まった強い意思を内に秘めた方という鮮明な印象を受けた。入学式において壇上でしか拝見したことのない総長と身近に接したこの時、同志社そのものがすごく近い存在になった気がした。祈祷会が終わると山を降り、しばらく京都の町を歩いてから喫茶店で朝食を採り、3人は帰途に着いた。しばらく後に校長室で生島先生から「次の機会にはぜひ上賀茂の家により、食事していくように！」と勧められた。

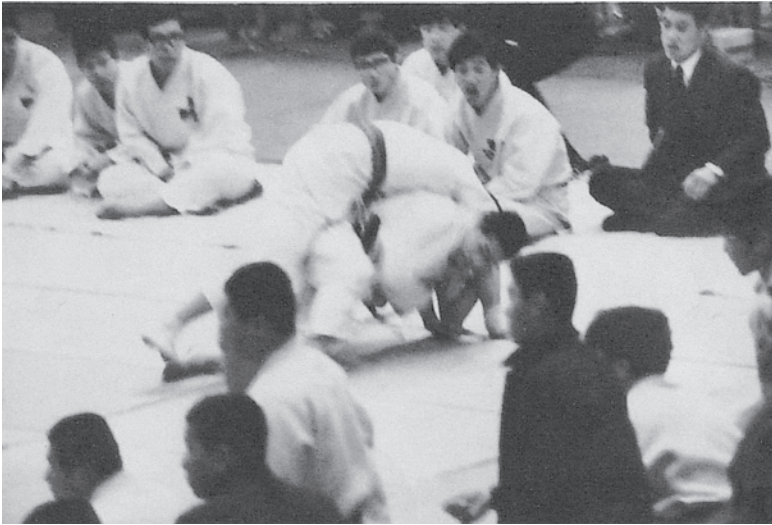
\*

夏休みに入った頃、思いがけない1通の手紙を受け取った。差出人は1か月あまり前にお詫びに行った女の子Mだった。私の名前と住所がなぜ彼女に分かったのか、不思議だった。手紙にはまず6月のあの日のことが書いてあった。「あまりに良いお天気だったので日光浴をしたいと考え、庭の芝生にバスタオルを敷き、横になっていた」そうである。それから、1週間後にお詫びに行きあげた聖句カード帖のお礼もあった。なぜかはにかんでいるように思える字が心に残り、それはお宅を訪ねた日にチラッと見た彼女の表情と重なった。しばらくして返事を書いた。改めてお詫びを言い、彼女の手紙へのお礼を認めた。2学期に入った頃、2通目の手紙が来た。意外にも彼女は枚方市立第一中学校に通う中学1年生で、ソフトボール部に所属していた。道理で日に焼けた顔をしていたわけである。私は彼女が高校生か中学生だとしても、上級生だと思っていた。たった2通の手紙だったが、それはなぜかこれまで知らなかった世界へと誘う力を持っていた。手紙の事を考えているととても満ち足りた気分になされたが、心のどこかに不安があった。それで当時胃潰瘍で入院しておられた浜里満典先生に、「思いがけないきっかけで、中学1年生の女の子と文通するようになりました」と手紙を書いた。浜里先生からついに返事はなかった。一抹の不安を感じながらも、文通は続けた。少しづつたまっていく少女Mの手紙は、いつしか心を大きく占める宝物となった。ところが、秋も深まると大切であればこそ、これからど

うすればいいのか全く分からなくなりました。文通を続けるのであれば、3歳年上の私がおはっきりした目的を持ち、目標を示し、責任を負わなければならない。ところが、この先どうすればいいのか何も思いつかない。悩みつづけてどうすることもできないという結論に達した時、これ以上手紙を書くことはできなくなりました。たまらない気持ちを堪えながら、12月に入ると「これ以上、手紙を書くことはできなくなりました」と正直に、しかし一方的に書いて送った。それでも彼女の手紙を捨てるわけにはいかず、大切に仕舞っていた。けれども、文通を断りながら手紙を持ち続けているのはおかしいと思った、クリスマスも終えた12月のある夜である。いつものように体操服に着替えて柔道の打ち込みをした後に、地面に小さな穴を掘った。そして、手紙を家から持ち出して、封筒と手紙の一枚一枚を穴の上で燃やした。すべて燃やした後で、灰になった手紙の上に土をかぶせた。その夜、「初恋」と題して小さな詩を書いた。「寒い夜に そっと マッチを擦った。燃えていく、君の手紙が燃えていく。僕の心が 燃えている。」

感傷的な「初恋」は、あの時せめて自分の心に語りかけるために書いた詩である。掛けがえのない文通を続けられなかった無念さが、そんな感傷でないことはよくわかっていて。けれども、いくら考えてもそうする以外に仕方がなかった。大切さを知りながら、それを燃やすしかない悲しさは私を打ちのめした。そんな私が家族にどのように映ったか、考えるゆとりなどなかった。そんなある日のことである。珍しく奥の部屋に誘った父がこのように語りけてきたのである。「お父ちゃんの仕事はな、紙の仕事やさかい、寒い時でもストーブを焚くことはできひん。暑い日でも扇風機を回すことはできひん。そういう所で、お父ちゃんは一仕事をしている。きびしい仕事や。でもな、どんな仕事でも仕事というのはそういう厳しいものや。和夫には一度、お父ちゃんの仕事場を見せてやりたい！」何度も聞かされていた父の言葉は、あの時生きる厳しさを指摘していたと思う。父はあの言葉でうなだれている私を精一杯、「頑張るんや！」と励ましていたのであろう。後に日本基督教団 大津教会に初めての就職が決まり、いよいよ着任する数日前に夢を見た。夢の中で父は寒くまだ暗い朝に、ただ一人職場に向かっていった。その後ろ姿は「仕事は厳しいものや。頑張らんとかかん！」と語りかけていた。

1969（昭和44）年1月、大阪府高校柔道新人戦があった。新人戦は3年生が引退して柔道の選手が交代する時期に開催される大会で、2年生4名と1年生3名の合計7



浪商の先鋒 Y 君に投げ技を掛ける私  
新人戦 1969年1月

名で1チームを作った。高鍋・加藤と共に1年生3名の選手に選ばれた私は先鋒を務めた。団体戦の流れを作る上で先鋒の役目は大きく、そのために勝たなければならない。ところが、この日初戦の相手は優勝筆頭候補の浪商であった。しかし、十分練習を積んでいたし、野原部長・林先輩の激励をいただいた選手は浪商に負ける気はしなかった。いよいよ試合が始まった。勝たなければならない先鋒戦に私は臨んだ。浪商の先鋒はY君である。試合は初めお互いに小技を出して、相手の出方を探り合った。組んでみてY君はさすが浪商の先鋒と思わせる力の入れ方、身の柔軟なこなし方を見せていた。相手に圧力をかけるほどしっかり力を入れていて、しかも柔軟で素早い対応をしていたのである。ところが、試合も中盤に入ろうとした時、彼は圧力をかけて押ししてきた。たちまち味方選手のすぐ前までじりじりと後退させられる。その時、一瞬の隙がY君にあった。その隙を捉え私は低い姿勢からの背負い投げで場内から場外へY君を投げた。「一本取った!」と思った。味方の選手も立ち上がり、「一本!」「場内!」と審判にアピールしている。ところが、しばらく黙って境界線を見ていた審判は首を横に振って、「場外!」と判定した。この時から、Y君の試合態

度が変わった。守りを固め、引き分けに持ち込もうとしたのである。そのため、攻めきれず、先鋒戦は引き分けに終わった。残念ながら試合の流れを作ることができず、団体戦は負けてしまう。しかし、新人戦で学んだことは大きかった。野原先生は「相手を仕留めろ！」と言われた。先鋒は相手を仕留めなければならない。優勢勝ちであっても、寝技であっても、一本勝ちであっても、どのような勝ち方であっても相手を仕留めれば良い。そのために相手を見て仕留め方を考えながら、柔軟に試合をする。新人戦は予想通り、浪商が優勝した。

## 注

- 1) 生島吉造（1906-1919）同志社大学卒業後、アーモスト大学に学び卒業した。同志社大学学生主事・同志社庶務部長を経て、同志社香里中学高校校長を務める。下記の著書がある。  
生島吉造・松井全編『同志社歳時記』同志社大学出版部、1975  
生島吉造・松井全編『同志社歳時記 続』同志社大学出版部、1977  
参照、塩野和夫「忘れえぬ師」（『一人の人間に』新教出版社、59-60頁）
- 2) 中西典彦 京都大学教員を経て、甲南大学で学長を担当した。現在、淀川キリスト教病院理事長を務めている。1960年代から70年代にかけて、日本基督教団 香里教会の教会学校校長を長く担当した。
- 3) 升崎外彦（1892-1976）救世軍で伝道活動に従事した後、1927年から和歌山県南部町で開拓伝道を始める。南部教会を設立した。
- 4) 吉田松陰（1830-1859）長州藩士。江戸で佐久間象山から洋学を学ぶ。1854年に下田から密航を企てて、投獄される。その後、郷里の萩で松下村塾を開き、高杉晋作・伊藤博文等を育てる。
- 5) 大橋寛政（1910-1985）同志社大学神学部を卒業して、同志社香里中学・高校で聖書科を教える。1966年度から2年間、校長を担当した。一高校生の自殺に対して責任を取って校長を辞任する。その後、再び聖書科を教えた。
- 6) 住谷悦治（1895-1987）同志社大学・松山高校で教えた後、戦後は夕刊京都新聞で論説を担当する。その後、同志社大学に復帰し、1963年から同志社総長を務めた。
- 7) 参照、塩野和夫「父のこと」（『一人の人間に』新教出版社、80-82頁）